

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 19 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520018

研究課題名(和文)意識概念の歴史性とその哲学的意義

研究課題名(英文)The nature and historicity of the concept of consciousness

研究代表者

中畑 正志(Nakahata, Masashi)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：60192671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：デカルトが意識概念の形成に果たした役割は、conscientiaというラテン語を倫理的な意味から心理的な意味へと変更したことでなく、外的世界との関係を欠いても真である領域を発見し、それにこのラテン語を結びつけたことにある。デカルトがこの概念を適用した「見ることを知覚する」という高階の知覚について、アリストテレス、ストア派や新プラトン主義者の分析はそれぞれ異なり、とりわけアリストテレスはこの高階の知覚が外的世界の知覚に内含されると考えたが、デカルトの意識概念はこの関係の切断による歴史的産物である。なおカドワースのconsciousness概念には、デカルトより新プラトン主義の影響が大きい。

研究成果の概要(英文)：Descartes is said to be the first to use the Latin word "conscientia" in a psychological sense, such as awareness or consciousness, but the word had already been used before him in such a sense. Descartes' pivotal role in the history of the concept of consciousness rather consists in his applying the term to an inner realm discovered by him, in which, he finds, things are as they are independently of the external world.

One instance where Descartes suggests this new way of thinking using the term conscientia is his discussion of the phenomenon "our perceiving that we see" (de ipso sensu sive conscientia vivendi). The same sort of phenomenon is elucidated by Aristotle in an opposite way from Descartes: the second order recognition of one's activity is involved intrinsically in the perception of the external world. Descartes broke this Aristotelian unity between our inner activity and its external objects, and the Cartesian concept of consciousness is a historical product of this break.

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：意識 自己知覚 デカルト アリストテレス カドワース ストア派 新プラトン主義

### 1. 研究開始当初の背景

(1)1980年代ごろから、意識 (consciousness) の概念が、心の哲学の中心問題として再注目されてきているが、そのなかでは「現象的意識」と「アクセス意識」が区別され前者が「ハード・プロブレム」を構成すると考えられていることが示すように、意識概念の意味の理解とその区分が重要な論点となっている。しかしこうした論争において、意識の概念がどのような経緯を経て、またもともとどのような意味で成立したのかが顧みられることは少ない。

(2)意識の概念についての従来の歴史記述は、デカルトがラテン語 *conscientia* の意味を倫理的意味 (良心) から真理的意味 (意識) へと変革したことを強調してきたが、古典期及び中世においてもすでに類似した心理的意味でこのラテン語は使用されているなど、この歴史記述にはいくつもの疑問が指摘される。

以上の事情から、意識概念の成立と受容について本格的な歴史研究がいま必要であると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究は、以上の事実を踏まえて、デカルト及びそれ以前の文献の調査と分析を通じて、意識の概念の成立についての従来の記述を再検討するとともに、文献にもとづいたより精確な記述を目指すものである。また同時に、しばしば意識の概念の不在が主張される西洋古代の思想についても、以上の分析によって明らかとなった近代の意識概念の特質に照らして、あらためてその有無を検討するとともに、古代の思考の独自性を明らかにする。さらにこうした作業を通じて、意識概念の歴史的性格をより明確化し、その哲学的意義を再考する。

### 3. 研究の方法

(1)デカルトにおける *conscientia* の概念の形成過程を、デカルト及びその周辺の著作の再検討を通じて文献学的にあとづけるとともに、この用語のそれ以前の文献での使用状況を確認し、デカルトの革新性を正確に見積もる。他方で、英語 *consciousness* の導入のうえでラルフ・カドワースの果たした独自の役割について、その背景にある新プラトン主義思想に従来より注意を払いながら解明する。

(2)デカルトらがこの概念を使用して論じた事柄や事態 (自己知覚など) を、意識の概念を使用していなかったとしばしば考えられている西洋古代の思想家たちがどのように考察したのかを確かめ、意識の概念の特質や独自性をより明確にする。

(3)以上の二の局面から意識概念の歴史的性格を明らかにし、そうした歴史的性格が意識をめぐる現代の論争に対してどのような意義をもつのかを展望する。

### 4. 研究成果

(1) まず、デカルトの著作内におけるラテン語 *conscientia* およびフランス語 *conscience* の用法を枚挙し当時の言語状況との関連で分析をおこなった。ラテン語 *conscientia* については、古典期およびスコラ哲学、そしてストアレスなどにおける *conscientia* の用法、および聖書などの非哲学的文献でのこの言葉の用法において、*conscientia* が「気づく」など広い意味で「意識」と訳しうるような意味で使用されていることなどから、デカルトがこのラテン語の意味を「良心」から「意識」へと転換したという通説は誤りであることが論証された。しかし同時に、懐疑論に対する彼独自の応答を通じて、デカルトがこの語とこの語を用いて規定される *cogitatio* の概念の使用を通じて、心ないし精神をめぐる概念の枠組に大きな変革をもたらしたことも確認された。すなわち、外的世界のあり方と独立にその真理性が主張される領域 (主観性の領域) の「発見」である。なお、フランス語の *conscience* の意味の変遷については、Rodis-Lewis の研究が示すように、デカルトが意味の変換に重要な貢献をおこなっていると考えられる。

他方、ラルフ・カドワースについては、その主著 *True Intellectual System of the Universe* を中心に、彼によってはじめて英語として本格的に導入された *consciousness* の概念の意義を分析した。カドワースの *consciousness* の概念は、デカルト以上に、プロティノスをはじめとした新プラトン主義の影響が大きいことを論証した。具体的には、新プラトン主義の魂の理論、とりわけ魂は外的世界の作用を受けないという前提にもとづいて理解される *sunaiesthesia* を継承する言葉としてこの *consciousness* を導入したのである。そのことがカドワースのこの概念理解に含まれる自己認知的、自己参照的性格の大きな源泉であり、またある仕方でこの言葉の受容にも影響を及ぼしていることを展望した。

(2) デカルトおよびカドワースを中心とした近代における意識概念の形成に先立つその前史についても歴史的解明を進めた。

まず、古代における意識概念の有無や形成という問題と深く関係する自己知をめぐる思考について、デルポイの神殿に掲げられたとされる箴言「汝自身を知れ」の起源と当時の理解をたどり、それが世界と社会および他者との関係のなかで自己の位置やあり方を知ることを基本的な意味とすることを確認した。さらにプラトンは、このような意味を出発点としながら、次の点でこの自己にかかわる知の理解を深化させている。すなわち、(i)神との比較における自己の無知なる状態の承認、しかしその承認自体の知としての性格の認定、(ii)自己の無知の承認による他者より知があるという比較級の知の認定 (『ソクラテスの弁明』) (iii)自己の内なる神的要素の

認定(『アルキピアデス I』、(iv)高階の知の可能性と不可能性という問題の提示(『カルミデス』)。

(3) (2)の(iv)の問題はアリストテレスによって「(自分が)見ていることを感覚する」という事態の分析というかたちで継承されている。そしてこの事態は、その後さまざまな立場から議論され、そしてデカルトが *conscientia* の概念の使用によって独自の仕方

で分析した事態でもあり、意識の概念の歴史を考える上で、いわば試験紙となる事態である。

(i)この事態についてのアリストテレスの理解をめぐっては、きわめて多くの解釈が提示されているが、本研究では『魂について』第三卷第二章および『睡眠と覚醒について』第二章の議論の分析および多くの論者の見解の批判的検討を通じて、アリストテレスの見解は、この高階の感覚知覚を特別な内的感覚に訴えることなく理解するものであり、むしろそれは外的な世界の知覚に伴い、また外的対象の認知に関わる形で成立していると理解されていることを論証した。またアリストテレスは、このような意味で理解される「感覚の感覚」を「共通する感覚」に関係づけているが、その「共通の感覚」も、感覚がたんに五感に与えられるものに限定されず外的な世界のあり方全体を認知する能力であるという、外的世界と感覚との豊かなかわりを示すものとして理解されている。

(ii)同じ事態は、アリストテレス以後、キュレネ派によって「内的触覚」という概念のもとで論じられている。デカルトの「感覚の感覚」としての意識と比較したとき、把握不可能とされる外在する事象と対比され「内的」であること、そして確実不可謬性である点でデカルトに類似した面をもっているが、外界の存在と作用を前提とし、また身体において遂行される活動である点で決定的に異なる。

(iii)ストア派においては、「感覚の感覚」は、外在するものの感覚と関連しながらも区別されるかたちで、「自己の感覚」の一部となっている。ストア派においては「自己自身」という点が問題としてより顕在化し、その範囲と理解をめぐってさまざまな考察が展開されている。

(iv)同様の事態についてのプロティノスによる分析では、外的感覚とは別の「内的な感覚」がはっきりと要請され、外的なものの感覚は、「内的なもの」の把握あるいは自己の理解から明確に分断される。そして「感覚の感覚」あるいは内的感覚は、外的な感覚から離れた位置、すなわち知的能力との「境界領域」へと置き直される。

以上の経緯は、外在するものの感覚と「感覚の感覚」とを分離し、「感覚の感覚」を自己自身の感覚、そして内的感覚として理解するものであるという点において、デカルト的な思考を準備する「内向きの思考の運動」として位置づけることもできる。しかし新プラ

トン主義者のものも含めて、(第一階の)感覚は身体及びそれに作用する外的な世界の存在を前提としているが、デカルトは、「感覚の感覚」という事態への独自の見方によって、感覚を身体性および外的世界とのかわりを捨象したかたちで理解することができた。これは、古代の懐疑論と異なり、自己の身体性や外部世界をも疑いデカルトの懐疑論のラディカルな性格に対応している。

しかしとりわけ重要なことは、アリストテレスの魂論における理解と、それを批判して成立したデカルトの心の哲学における理解との相違と対比である。アリストテレスにとって第一階の感覚とともに「感覚の感覚」も、環境と身体との共同関係において成立し、魂の活動と外的世界との本質的連絡関係を示すものであった。これに対して、デカルトの意識概念の導入において重要な役割を果たした「感覚の感覚」の理解は、このアリストテレス的な一体性を断ち切るものである。そして、このように理解された「感覚の感覚」といわば換言されるかたちで導入されている意識(*conscientia*)の概念は、この断絶から生まれた歴史的産物であると言えるだろう

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

中畑正志 "Aristotle and Descartes on Perceiving that We See." *The Journal of Greco-Roman Studies* 49, 2015. 査読あり

中畑正志、「見ていることを感覚する 共通の感覚、内的感覚、そして意識」『哲学』64号、2013年、78-102頁、査読なし

中畑正志、「歴史のなかのアリストテレス」『新アリストテレス全集 第一巻』所収、407-442頁、2013年、査読なし

中畑正志、「meden agan から離れて 自己知の原型と行方」『西洋古典学研究』第61号、100-108頁、2013年、査読あり

中畑正志、「意識の概念史における小さな纏れ」『哲学の挑戦』(春風社)、229-260頁、2012年、査読なし

中畑正志、「像と類似性 小池澄夫の仕事をめぐる覚書」『古代哲学研究』44号、66-82頁、2012年、査読あり

中畑正志、「応答 荻原の批判に答えて」『古代哲学研究』44号、60-65頁、2012年、査読なし

中畑正志、「アリストテレスは「場所の論理」に何か関係があるのか? (西田哲学--その論理基盤を問う)」『アルケー』19号、31-46頁、2011年、査読なし

中畑正志、「アリストテレス『魂について』をめぐる注解者たちの議論」『イスラーム哲学とキリスト教中世 I 理論哲学』岩波書店、

107-138 頁、2011 年、査読なし

( )

〔学会発表〕(計 4 件)

中畑正志、「見ていることを感覚する  
共通の感覚、内的感覚、そして意識」(学協  
会シンポジウム「アリストテレスを見直す  
その背景と達成、そして遺産」)2013 年  
5 月 12 日、お茶の水女子大学

研究者番号 :

(3) 連携研究者

( )

中畑正志、「志向性再考」、フッサール研究  
会、2013 年 3 月 23 日、大阪大学

研究者番号 :

中畑正志、「『魂の変容』をめぐって」、西  
日本古代哲学会、2012 年 11 月 3 日、福岡大  
学

「からの逸脱」(シ  
ンポジウム「デル  
ポイからのメッセージ」)日本西洋古典学会、  
2012 年 6 月 2 日、龍谷大学

〔図書〕(計 3 件)

中畑正志、『アリストテレス全集 7 魂に  
ついて 自然学小論集』(「魂について」の訳、  
注解、解説) 岩波書店、2013 年、556 頁

中畑正志、『アリストテレス全集 1 カテゴ  
リー論 命題論』(「カテゴリー論」の訳、注  
解、解説) 岩波書店、2013 年、461 頁

中畑正志、『魂の変容』岩波書店、2011 年、  
334 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

取得状況(計 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中畑正志 (NAKAHATA Masashi)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号 : 60192671

(2) 研究分担者